廿一年四月（版權所有）十四日發兌

THE WOMAN'S MAGAZINE.

女學雜誌

東京女學雜誌社

一冊五錢
府內無稅
郵稅一錢
每土曜出版

第百五號

社説
理想之佳人（第二）詩人小說家の佳人

論說
小兒の精神及其保護法（榊俶）〇日本婦人の地位（伴直之助）

批評
雛黄鸝

叢話
善良なる母を造るの說（中村正直）〇櫻花は爛熳たり〇婦女に限るもの〇百人一首一口話〇古ばなし（高橋愚）〇農夫吟

小說
都鳥〇小說神髓

佳傳
ガルトン夫人

寄書
宮川德子の傳〇文苑（鈴木弘恭撰）

小供の話
小娘とヒキガヘル

新報
花の薔薇戀の咲分〇女學校の試驗及休業〇日本婦人の洋裝其外二十件

專賣二〇三、一一一五

詳和堂中川昇刻

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 105, April 14th, 1888.

EDITORIOL:— Ideal Belle ; No. II. Ideal Belles of Poets and Novelists.
LEADING ARTICLES:— Child's Brain and How to Protect it, by Prof. S. Sakaki; Position of women in japan, by Mr. N. Ban.
CRITICAL NOTES:—“Sūko Ri” (The Lady Nightingale).
MISCELLANIES:— Views on the Making of Good Mothers, by Senator. M. Nakamura; The Cherry Flowers are in Full Bloom ; Characteristics of women ; “The Farmer.”
NOVELS:— “Miyakodori” : No. III ; Bouquet of Novels.
BIOGRAPHIES:— Mary Anne Galton.
CORRESPONDENCES.
CHILDREN'S COLUMN:— A Girl and a Frog.
GENERAL NEWS.

前號(第百四號)目次

●社說　理想の佳人(第二)心中の畫像
●論說　女權伸張の方向(田口卯吉)小供の精神及保護法(榊俶)
●叢話　言文一致の大忘却○獨逸小說の沿革(久松定弘)○女學校の賄ひさわぎ○山吹孃
●小說　都鳥○小說神髓
●佳傳　メレー、ガルトン
●寄書　山内孺人行實(川上源吾)
●小供の話　尤も尊ふとき所行○狐と盜人
●新報　福岡てる子○女學校の音學會文學會其外二十件

●珊瑚の珠　(第六十一回)

東洋の美人

井上新桃偷ニ面色一。擔邊嫩柳學ニ身輕一。(文德皇后)
黟星臨ニ夜燭一。眉月隱ニ輕紗(褚亮)
星模鉛裏黟。月寫黛中蛾(許敬宗)
裙輕纔動レ珮鬟薄不レ勝レ花(謝偃)
羅裙玉珮當レ軒出黠翠施レ紅競ニ春日一(李嶠)
慢臉嬌娥纖復濃。輕羅金縷花葱蘢(岑參)
睡起昭陽淡々粧。不知緣レ底背ニ針陽一若教ニ轉レ眄
一回首三十六宮無粉光　背面美人圖(韓子蒼)

光陰矢の如く梭の如く玉琴既に破瓜の春を向ふその心賢のみあらず顏色又て絕麗にし立て晚風に近けば蛺蝶を迷し坐して秋水に臨めば芙蓉を欺くのすかたあり(馬琴)
祖女容姿絕麗にして眉は遠山の緣を畜き肌は芙蓉の露を疑らす花唇鶯音秋波人をして春心を動かしむ(馬琴)
御齡既に二八にして金鷄障の下に圍かれて玉樓殿の内に入り給へば天桃の春を傷める粧ひ垂柳の風を含る御形毛嬙西施も面を耻絳樹青琴も鏡を掩ふ(太平記)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌第百五號
明治二十一年四月十四日發兌

社説

〇理想之佳人

（第二）。 詩人小説家の佳人、

士らひは己れを知る者の爲に死し、女ハ己れを愛する者の爲に、粧はふ。故に一國の氣風、一世の時好に愛せられんと欲するものハ、勢ほひ、此の氣風、時好、の需めに應じて粧はざるはあらず、而して此の粧ほひを好むの情、特に婦人女子に多し、彼等は概して、餘まり當世に掛離れたる風俗を爲さず、亦餘まり世間並に飛離れたる樣姿を、敢て爲るものにあらず、多くハ皆な、普通の需要を覺悟して、以て一國一世の爲に形ち造くるものゝ、あらざるはなし。」此故に、獨逸の婦人ハ桃花の如し、質朴にして、所帶持に長ず。英國の婦人は梅花の如し、沈重にして、賢良の徳あり、米國の婦人に至つてハ、活潑輕淡、喩へば櫻花の爛熳として、春光に香ふが如し〇其の國に依て斯の如く女風の異なるものは、即はち其國々の氣風時好の相ひ異なるによる、更らに言を換ゆれば、彼の婦女子を愛するものゝ理想、國によつて其の趣きを異にするに由る。獨逸の男子は、頑強なり、獨逸婦人の自から質朴なるは、之が爲なり。英國の男子は、尊大なり、英國婦人の自づから自重なるは、之が爲なり。米國の男子は、有爲快活なり、米國婦人の活潑輕淡なる、亦自から之に因るなり。而して其形造らるゝや、啻に婦人女子のみにあらず、眼を轉じて其裏面を窺ふときは、國々の男子は、亦た是れ其國女流の氣風好尙に依つて、自から其狀態を造るものなり。左らば、男子の理想によつて一種の佳人を生じ、佳人の理想に依つて、一種の男子を生ず、然らば則ち、吾人は、日本男子の理想する所ろ何如んと、問はざるべからざる也。

夫れ、個々の男子が、其の銘々の胸中に於て理想する所ろの者は、點々、相積んで、遂に一國民が願望する所の氣風時好となる、即はち、其一國民の理想なり。而して、一國民をして兎も角も其の理想を一定せしむるに付ては、個々の男子中、自づから其勢力の甚はだ強きものと、甚はだ弱きものとあり、而して、其尤も強きものを、詩人小説家と爲す。

抑も、詩人小説家は、心身、是れ想像を以て成立つものなり、其の眼たる、常に有形物の後に一種の玄妙を認む、故に若し之を熟視すると少頃なれば、其物忽焉として一躍活動する

に至るべし。將た其の耳たる、亦常に、音聲の裏に一種の隱微を聽く、之を聽くこと少焉なれは、亦た乍ちにして天の使の玉音玲瓏たるを聽き、或は幽として美なる全然現世以外の高調の如きを聽く。肉眼肉耳既に然り、其の靈妙なる頭腦の内には、幾多の思想、幾多の感情、なりなりとして存在し、其の存在するや、判然明白にして、殆んど活世界に現はるる所の者を、其儘に見ると異なるなし。之れを以て、詩人小說家は、當世第一の佳人を想像して、其の想像の佳人は、之が理想境内に活動せり、古し左甚五郎が美人の像を刻むや、像成つて、美人紅顏、袖を口にして舞ひ出でたり、思ふに、詩人小說家が理想する處の佳人は、卽ち、甚五郎が細工に均しきもの也。

此故に、一國民が佳人の理想を承知せんと欲せは、先づ、其國の詩人小說家が、或は詩歌に咏み出で、或は稗史院本に作り成したる、所云る其想像の美人なるものを、竊ひ見るを善しとす」銳敏勇壯、而かも溫情の優和なる、ローサリンドの如き。愛情無限、郞の爲に一身を犧牲にして、毫末も其己れを顧みざる、コルデリヤの如き。辨智明慧堂々として天下の男才子を壓倒し、而も其意中の人に仕ふるの貞淑なる、ポルシアの如きは、皆なシェークスピアの佳人なり。チヅチルスは、甚だ之に迂なれども、尙ほ一二の理想あり。バイロンの理想好評を得ずと雖ども、尙ほ幾多の佳人ありき。其他ゲーテのナタリア、フェーアセイントに於ける、リチャードソンの、ハーローエに於ける、ゴールドスミスの、ソフヒアプリモロースに於ける、或は佳なり、或は可ならず。其他、スカツト、リツトンより、近代の諸小說家に至るまで、凡そ小說として、卷中一二の佳人ならざるはなし、卽ち、是れ、彼等が撰に撰り、好みに好みて作り出したる理想境内の美人ならん。而して、我國の詩人は、古來餘り美人を咏ぜず、其の小說家に至つては、定則通りに雜多種々の佳人を製造したりき。馬琴の濱路、白縫、駒姬に於ける、春水の仇吉、米八に於ける、近松竹田以下の徒が、お駿、お半、三勝の流亞に於ける如き、大凡そ、一冊の作り物、一本の淨瑠璃中、必らず一二の佳人ならざるはなし。卽ち、是れ、彼等が腦漿を搾り、丹精を凝らして、仕上げたる理想境内の美人ならん。左れば、西洋の淑女は、暇ある節々、或は其詩を吟じ、或は其小說を愛讀して、知らず識らず、其詩小說中の佳人を手本とし、之を其の粧飾の玉手箱に納めて、朝々暮々のお化粧心

得に用ゆるものあり。而して我國の婦女子に至つては、此の摸倣特に尤も甚だし、或は火鉢の傍らに人情本を讀み暮して、徒らに、其の卷中の佳人たらんとするの大望を立つるものあり、或は端歌浄瑠璃に浮れて、我も亦た其の歌の中の意氣者とならんと欲するものあり、或ひは演劇興行に目前の實例を見て、空情に泣き、空理に服し、心中密に大に決するものあり、日本從來の作者小說家が理想したる佳人の、我國惣躰の女風に關係を及ぼしたると、眞に莫大なりと云ふべし。

而して、今や民情殆んど一新し、演劇も改良せられんとし、詩歌も改良せられんとし、小說も亦た改良せられんとす、若し果して此等のもの悉く改良せられたらんには、其の趣向、詠風、作り方等の改良せらるゝと共に、之に理想せらるゝ處の佳人の一大改良を得べきと、亦必定なり。但だ夫れ、今日尙ほ未だ其の實に改良せられたるを見ず、即ち、演劇に立出る所の美人も、詩歌中に現はるゝ所の佳人も、尙ほ左したる新風の粧ひを示す能はざるに當り、獨り、小說に於ては、先づ〳〵、多少の新粧佳人を窺ふを得たり。見るべし、春の舍おぼろは、阿雪を愛し、鐵膓居士は、阿春を愛し、東海散士は、米國に於て紅蘭幽蘭の兩女丈夫を愛し、鳴鶴仙史は、淸朝に於て瓊英と云へる烈女子を愛し、二葉亭四迷は、お勢を寫し、春萍逸人は春枝孃を重んずるものゝ如し。抑も、此等の小說家が、それ〴〵に愛する所の理想の佳人は、果して亦た當今の日本婦女子に愛せらるゝや否や、而して、此等の佳人は、又た果して新日本女流の理想たらしむるに足るべきや否や、吾人は、二つながら之を知らず、然れども、此等の小說が甚た世に重んぜられて、其の感化流行の尤も夥たゞしきに付ては、吾人は則ち之を對岸の火事の如く只だ白眼冷視して、止むことを得ざるもの也。

論說

○小供の精神及び保護法（其四）

榊俶述　佃與二郎筆記

今迄斯く詳しくお話致たとは世の母君達は皆御承知の筈で有升けれども其時こそは知て居れませうけれども喉元過れば熱を忘る習で後に至ては恐らく三人以上の子を擧られたるの人にあらずば私の今迄申たとを御記臆あるまいと思ひます故に斯う云ふ工合にして精神が發育して行く者との順序を申したのであり升が今度より醫者樣の方のお話をしやうと思のです

先づ小供も大人も精神の宿て居る所の容子は何所かと云ふとを申しますが一躰魂がありて志、望などの出きるのは頭の腦髓であり升が大人の腦髓を出して見れば圓き豆腐の樣なものです小供のを見まするとやはり豆腐の如きものですが之を大人の腦に較ぶれば大層違ひ升大人のは堅さが丁度田舍て拵へた堅き豆腐の樣又小兒のは絹越しの豆腐と云ふ位です而して其色も能く似て居り升赤子の方の腦は大層水が多くて指で推せば直に破れます之に因て考へますと物を多く覺へれば次第に堅くなるのです小供の腦は又形が小さく御座りマス夫故小供は何うしても大人の爲すとだけを仕樣と云ても出きるものではありません又猶ほ委しく申升と精神は腦の上皮にあるものです豆腐の如き者の回りは薄鼠のもので包んであり升此所、に精神がヤドリて居升今之を較べますと小供の腦の上皮は平らで大人のは高い所と低い所とがあり升故に大人の腦は其上皮が大きくして精神も之に從ひて澤山に發育し升是れは醫者か解剖家の言ふとだから餘り述べませんが今一つ醫者に大事のとがあるから序に述べませう。

其は外ではありません生れつき頭の開くのがあります之を頭水と云ふて生れる前にもあるが大概生れてから發するもので腦の中に水が溜つて溢れて來て所謂福助の樣になり馬鹿となるので御座り升是れは水が溜る爲めに腦が推つけられて其働を爲すとが出きないのです又之と反對に頭の小さくして額より上のなき者もあります此等は大抵直きに死にますが幸にして三歳四歳頃まで生きて居るのもあります私は四十三才の西洋人の丈は私より高いが頭は小兒位のを見ましたソコデ是迄の例を見ますると頭又腦は大切なる精神を釀す所です。

是れよりは小供の精神心持を育て上るには何うしたら宜しからうかと云ふに小供の精神をごく強くして人に擢んで利口だと云ふ樣にするには第一身躰の衛生です身躰が強く健康なれば魂も健康になりますソコデ衛生學で論ずる衣服の清潔空氣の流通食物の良否とか云ふとは私は略して申しませぬが精神の保ち方を申せば則ち精神の教育であらうと思ひ升小供の精神を其時に從て良方に導かうと云ふ考ですソレは今迄段々お話致した順に因て御考になればお分りにならうと思ひ升先づ赤子に乳を上る時分には精神と身躰の十分發育するの始めでありますから乳を與ふる時に心得べきとは母が神經病とか精神病とか肺病とか小供に傳はるべき病氣のあつた時は則ち身躰の丈夫な乳母を置くが宜しく御座り升否らざれば後に至て

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

母親と同じ樣な病を發することが澤山あり升今斯く申せば必ずお諮ねが御座いませうソンナことを云ふけれども赤子は其母君から生れたのでは無いかと私は申します成程母親の血を以て居りますから病の本はあるが其乳を飲めば益々わるく致します夫故成るべく之を避くる樣にしなければなりませぬ又生れました時にマクリ杯を與へますがアレは何うでも宜しい者で御座ります今日までの習慣として不淨を去ると云いますが一口に云へば兒を苦しめるに過ぎませんが左ればとて害にはなりませぬ。

次第に目の發育して行く時も矢張母と乳母とが注意しなければならぬことが有り升即ち眼の強くなる樣にするのだが白いもの又赤きものなど又光線の強きもので眩しきものを見せてはなりません後に神經病を起すの基となります且つ一ッ色を永く見せては能くありません乳を飲ませては見せ見せては飲ませる樣致し升次には物躰を動して之を見せ升然し最初は横へ動かして決して上下に動かしては往けません右と左りに眼がうつる樣になつて夫から上下に動かします耳にも矢張發育の順序があり升即ち寢かそうと云ふには靜かなる音樂を爲し遊ばせ樣とするには活潑なる音樂をして耳の力を強めます子供程音樂に注意し調の合う合はぬを區別することは大人は中々及びません日本では昔しから音樂が盛んと云うでもありませんが歐羅巴に往て見れば上下の別なく六歲か七歲のものが巧よピヤノの音を合せます。小供が既に口をきくことが出きる樣になればアの字とかヲとか容易き音から始めるが宜しい又齒の生る頃になればオシヤブリでも與ふるが宜しく有り升之を咬せて居ればハグキを破つて引付ける樣のことなしに齒の生ることが出きます、歩行が出きはじまる頃には大人が左右から手を引て一歩〳〵に運び方を敎へなければなりません然し歩行を始ることが餘り早過きると時として妙な足まがりになることがあります、言葉を敎るにも虛言を敎へぬ樣假名違ひのなき樣に注意しなければなりません敎育が隆なる歐羅巴でも小供のうちは隨分あるから日本のカーチヤンオツカー位は珍らしくもありません段々に改むる樣に注意するがよろしう御座る獨逸ではお出と云ことをコムと申しますが小供が之を言ふ時分にはトムと申します東京人は大人でもヒをシと云ひますが其邊を能く更めぬと成長の後困ることがあります、泥こねりを始めます時は母君から何時も出る言葉が「衣をよでしてはいけないよ」と云ふのです然うでなければ叱つて止ますが是れは十分遣ら

せるが宜しひ寒暑風雨の時の外は隨意に衣服のよごれぬ樣にして運動させなければなりません小兒の氣を沮喪せしめぬ樣發達を妨げぬ樣「チヨイトお待ちと裾をはしより腕をまくつて出して遣るが宜しう御座り升音樂は通例聞くに聞かれぬのが多いから母君は一概に之を禁止するものがあるが是れは別に歌を作るとか正しき淸き活潑なる音樂を授けて小供に歌はせる樣にしなければならんです。　(未完)

○日本婦女の地位　(其二)

伴直之助述

顧みるに婦女厚待の美風は近來漸く我國に吹き來れり否な我社會は長夢俄に破れて東西の方向を失せるが如き狀を呈せり何となれば左程婦女敎育の必要を知らざるの父兄も今や其囊底を振つて敎育に費すヿを喜び婦女の藝術は女大學と裁縫に越ゆべからずとせし家法は最早棄てられ令孃令妹は日夜精を盡して勸學するも猶ほ其の足らざるの憾みを父兄に負ふものゝ如し嗚呼今日は婦人に取りては堅氷漸く解け陽春到來して梅蕾漸く笑はんとするの好時機に會せりと云ふ可きなり、然れども世の尊信を受るヿ愈よ厚ければ責任も亦た從て加重せざるべからざるは一般の通則なれば今日の我國の婦女にして漸く地位を高くせられんとするに當りて是に應ずるの責は諸姉當さに任じて盡さゞる可らず近時婦人の集會諸所に起り諸姉が茲に婦人矯風會を設けられしも亦た全く此主意に外ならざるを信ずるなり。

左れば余輩が日本現時の女性殊に此婦人矯風會に向ひて望む所の數事を述ぶべし抑も矯風會とは何ぞ、字義によれば矯とは「タメル」と訓し曲りを直すと言ひ風とは暗に風俗の宜しからぬ有樣を含むの謂ひなり即ち婦人の宜しからぬ風俗を矯め直すとは明かに當會の目的ならん是れ美事なり然れども余輩倩〻我國の婦女を觀るに決して一般惡風汚俗に侵み居るとは見るべからざるなり蓋し我が姉妹は古來內に在りては三從七去の敎へにより只管ら沈默柔順を主として育てられ外に在りても男女交際の快樂は固よりのヿ婦女同志の交際さへ僅かに少數の親戚知己の間だに止まり誠に幽暗無望の境界に生息したるを以つて其の天稟の才能を伸ばす能はざると倶に性淡薄にして情慾盛んならず情慾盛んならざるが故に婦女が自から社會の風を亂し俗を敗ぶると云ふ程の惡者とならざりしは余輩が先づ以つて諸姉と共に慶賀する所なり見よ我國婦女は未だ福音の光に輝らされざりき然れども既に聖書の語を暗記して尙ほ惡を恣ひまゝにする或國の婦女とは同日の論にあらざ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ることを、又た見よ我姉妹は或は不學無能ならん然れども猶ほ柔順の内に所謂る婦道なるものを守り通したるものなれば假令ひ誤まりて道に背くことあるも寧ろ憐むべきに近きことを、譬へば嗜酒を禁じ喫烟を廢すること當會の目的の一ならん然るに余輩の見る所を以てするに我姉妹はレヴィット夫人の渡航前既に禁酒家禁煙家たりしなり、試みに見よ中以上に位して餘資ある家に在りては婦女の嗜酒喫煙を不行儀とせるにあらずや（但し老人若くは一家の主婦にして所謂るメウエのなきものは格別）又た中以下の家にては之を購ふの資に乏しく已むを得ずして己の慾を逞ふする能ざるにあらずや（但し妓女、湯屋の二階番、楊弓店等の婦女の喫烟飲酒は資本中に算入すべく自ら好んで爲すにあらず）人或は我國の婦女が不潔の事に從ふを以て之を不道徳的のものとなす成程斯の如き厭ふべき業躰の我國に存するは婦女あるが爲めなりと思へば一途に婦女が悪らしくなるべしと雖も是れ婦女が自ら好んで爲す業にあらず却つて他人に强らるゝの致す所なるを思はざるべからず彼の美服を着て道路に鯨飲するの貴女ハ歐米に之れあり深夜人聲絶ゆるに及び密室に入りて竊かに五斗兵衛を學ぶの令孃は歐米に之れあり輿論の攻撃恰も雷の如く響き敎會の淸歌能く胸中の汚情を洗ふに拘らず自ら不經の所爲を以て世人を惑はすの毒婦歐米に之れあり斯かる大膽不敵の婦女は多く我國にある乎諺に曰く「善に强きは悪にも强よし」と是れ歐米社會の情態にして又た其婦女の情態なれども我が姉妹は則ち然らず古來柔順の二字に支配さるゝが故に父母兄弟にして一旦不幸に陷ゐるか或は放蕩の爲めに貧困に沈むことあらんか女子は忽ち身を汚して以て其困苦を救はんとすることあり（他に之を救ふの藝術なきことも其一因ならん）或は時としては父母兄弟甚だしきは良夫に迫られて以て己を苦界に投ずることあり畢竟するに婦女が媚を献じ酒を薦めて宜しからぬことを爲すは本尊たる男子の爲に機械たるに過ぎざるなり彼の可憐の處女が己を犧牲に供するの善心より一旦身を泥土に沈むるや悪習漸く染て彼れ終に立派なる魔女と化し去るべし然ども其源は實に男子に發することを思へば余輩男子の罪極て深しと云はざる可らず、若し斯の如くんば我國の婦女は憐むべき地位に居るものなり婦女が高尚淸潔の生涯を送るも將た卑賤汚穢の日月を過ごすも一に男子の意向如何にありと云ふは譬へば婦女が自から斷岩絶壁の上に立ちて引くも落すも男子の力に一任するか如し豈に危險の至りならずや。余輩は祖先以來武士な

りき武士は事あるに當り君の馬前に死するを以て無二の忠義と心得復た其死の理否如何を問はざるなり然れども死何ぞ必ずしも眞の忠義ならんや是れ蓋し自然に反するの運命なればなり我國の婦女も亦た斯の如し百年の生命を男子に與へずして以て其本分を盡すの道爭でか他にあらざるべきや柔順は婦女の德なり然れども理否を辨へざるの柔順(Blind obedience.)は人類たるの本性を傷くるとを覺悟せざるべからず。(未完)

批評

(66) 雛黄鸝 (中本一册(三百七十二頁)定價六十錢 發兌所東京南鞘町十八番地正文堂)

此書は南翠外史須藤光暉氏が明治年間の春水と爲り當今の女氣質を寫して隱に勸善懲惡の旨を諭されたる小說なり本來古しの箱入娘と今まの蝙蝠孃とを對照し且つ自由結婚男女交際等の利害を示し最初の心得次第によりて後年の未來を推し上下の兩巻を以て因果のかゝり合ひを明白に現はさるゝの趣向あれば其の譬喩の信切なるに隨つて小說風の興味の索然たるは止を得ざるとあり。花村花は三味線稽古流の浮氣なる娘、上杉金は西洋生かじりの娘同じくお鳥羽は女學校育ちの我儘なる娘、唐澤お香は純然たる女大學の娘にして、芳川梅は是れ本書の女主人公辛酸を甞め盡して自から磨がき上げたる淑女なり、左れば後に至り花は離緣されお金は一生不運に陷いり鳥羽は一度び姦淫の大罪を侵しお香は辛うじて良人の愛をつなぎ梅夫人獨り勇愛なる良君と共に琴瑟の樂しみを盡すの趣むき譬ふるに宮濱劇の敵き打ち子供のチモチヤの機關人形の如し猶ほ餘まりに明白に餘まりに淡泊にして何う見ても作り物語としか思はれざるぞ遺憾なる。

外史の小說は近頃の稗史界に錚々たるものなり吾人常に其の著作を愛讀するものあるが之は亦た近來の不出來と評せざるを得ざるは外史の知己たる吾人の身には少らざるの不運なり察するに外史は今の娘方が倘ほ春水の猥褻小說を玩ぶを慨き則ち春水の文章と春水の句調とを衣物にしたる一種新時代のタメになる小說を作り此を以て彼に代へて滔々たる淫風を防がんとの好意に出でたり而して此の好意は反つて外史を縛り先づ其文章を鈍らし次に其の句調を卑しくし雛黄鸝一巻を殆んど死せる開化梅暦と爲したるぞ遺憾なる。

此故に巻中の五箇の女子何れも生きたる婦人とは思はれず反つて折々に顏を出す車夫、コック、お霞、東方の田舎のお老母さん茶の湯稽古の浮れ女原の類に活潑の生氣あるを覺ゆ特に

〇農夫　　しのぶ

春の日和の、うらゝかに、
　ひとはうきたち、たのしめり、
學びの窓に、ふみよみて、
　われこそひとり、しのぶなり、
胸をつんざく、世のさまよ、
　古今のせいはい、なげかれて、
窓よりそとを、ながむれば、
　はなは咲らへり、とりはなく、
おもひにせまり、やといでゝ、
　ひとり野もせに、さまよへば、
目に見るかぎり、てりわたり、
　わがおもふごと、なげきせず、
あわれやなまじ、世のことを、
　おもひそめてし、うらみなれ、
むねにあふるゝ、かんがいを、
　はらふよしなく、たゝずみぬ、
あなうれひなく、見ゆるかな、
　たつくるひとの、いもとせが、
こゝろをさなく、わらひつゝ、
　ところ得がほに、しごとせり、
われはしづかに、ちかづきて、
　そのたのしみを、うらやめば、
いづこもおなじ、うきおもひ、
　かれまたかれの、うれひあり、

芳川龍樹唐澤了庵の二人を寫すと略ぼ眞に迫り中にも了庵の頑陋を寫すところ尤も宜しきを得たりと云ふべし、

第百四十二頁了庵がお香の指にしたる指環を見て叱る所ろ了庵手を出せ。ハイ。其の手を見せろ。見せろと言へばなぜに引ッ込せる見せろ。ハイ。コレ見せろと言へば出さんか。ハ……イ。コーレ何したもんだヤイ見せろ。ハイ眞平御免下さいまし……。何だ夫れは是れは何だ、ヨーコリヤ、何だヨ是れは、是れは何だ何といふものだ、何だ、何だといつて親が尋ぬるのに何で返辭をせん、何故親に返辭をしない、お香默つて言ちやア分らん、是れは何だ、其手は何だ、オイ何だと言ば何だ、返辭をせんか不幸(孝)者メ。ハイ……ハイ……。エ、イ唯はいぢやあ分らん判然言へイ。此れは……何うか……ハイ直と返しますから……。ナニ何だと何した。恐れ入りました返しますから……御免遊ばして……。また誤るのか

此返十分に宜ろし、但し全躰を評するに本書の如き淑女方の購讀せらるゝには不適當のものならんと考へらる。

叢話

○善良なる母を造る説　中村正直

敬宇中村先生演説集一冊成る此頃ろ其惠贈を辱ふして誦讀するに中に「善良なる母を造るの説」一篇あり則ち請ふて左に轉載し讀者の覽に供ふ　善治識

余前に人民の性質を改造する説を演べモーラル、レリヂヲス、エヂユケーション(脩身及ひ敬神の教育)アート、サイエンス(技藝及ひ學術の教育)この二大分の教育よ由らざれば人民の心を一新し高等の度に進ましむる能はざることを説きたりこの二大分の教育何も肝要なれども其一は本原にして其二は末流なり技藝の教育は童子五六歲智識漸く開くる時より之を始むるとも遲しとはいふべからず脩身敬神の教養に至りては胎教尤も肝腎なり生れし始めよりその耳目に濡染し身體を圍繞するもの嘉言善行に非ざるはなく絶好の儀範に非ざるはなし然るときは小兒の智識の漸く開ける以前に知らず覺へずモーラル及びレリヂヲス(脩正の教及び天道の教)先入の主となるなり身躰强弱を以て之を喩へんに母胎に居る内に其母强健なる時は(其子生るゝ後當然の養育を受れば)必らず强健の人となる若し滋養足らざれば生れし後何程養生を爲し及び良醫の治を受るともその先天の時のものを當然に發生せしむる丈の事にて別に加へ益す所有ると能はず身體上に經驗して此理確然疑がふべきなしこれを精神心術に經驗して更に驚ろくべき感化功驗を顯はせり蓋しその子の精神心術の善惡は大抵その母に似るものなりその子後來の嗜好癖習に至るまでその母よ似るもの多し然る時は人民をして善き狀態風俗に變じ開明の域に進ましめんには能き母を得ざるべからず絶好の母を得れば絶好の子を得べく後來吾輩の雲仍に至らば日本は絶好の國となるべく脩身敬神の教も受る人民となるべく技藝學術の教

も受る人民となるべく智識上進、心術善良、品行高尙なる人民となるべし扨て善き母を造らんには女子を敎ゆるに如かず女子をしてモーラル、エンド、レリヂチス、エヂユケーシヨン(脩身及び敬神の敎)を受しめ男子に嫁して子を生みたらんにはその子は胎孕せし前より健康なる道理、旺盛なる精神、充滿し、善德の空氣を吸ひ天道の日光に沐浴するものから眼目を以て智識の門戸となし心思を以て無形の妙躰に及ぼし、他日剛强勇果、勤勉忍耐の諸德となる基本、既に搖籃に戯むれ乳養を受る間だに、備り立つといふも誇大の言には非ざるなり、男女同權の弊を氣遣ふは敎育のなき婦人の亭主を尻にしくを怕るゝに過ず天道を畏れ眞神を敬し技藝を好み學術を嗜しみその夫の輔助となり相愛し相敬するようになりたらば此等の心配はなかるべしさて又男女の敎養は同一なるべし、二種なるべからず苟くも人類總躰をして極高極淨の地位を保たしめんと欲せは宜しく男子婦人共に皆一樣なる脩養を受しめ其をして同等に進步をなさしむべし純淸なる婦人は純淸なる男子に伴なはざるべからず蓋し善法の律法は男子婦人の差別なくともに通用すべきは勿論なり善德多くある中にその最も主要なるは愛の德なり詩人ブラウニンクの名言に曰く眞正の愛は智識を與ふと試みに普天下の人を見よ天賦の才智最も多き人は眞實の愛情最も深き人なりといふも可なり深愛の情ある婦人はその夫をして福祉安樂を享しめ邦國の爲に有用なる事業を成さしむるとありこの事は西洋のみならず漢土にても古賢は着意し易に乾坤を首とし詩に關睢を冠むらす男女の正しきは天地の大義なりとも云へり文王の如きは母に大任あり胎內の敎を受け后に大姒ありて內助の益を受られたり然るに支那の學者この事を深く推擴せず獨り男權を重んずるととなれり今世の人或は婦人に書を讀しむるときは慢心するなどと云ふものあり夫慢心すると慢心せざるとは敎育上に關係すべしたゞ物質の上技藝の上に着意せしめなば我の知る處にあらず脩心及び敬神の敎を受しめて慢心に至るとのあるべきやそれに付ては西洋にても婦德を重んじ才藝を次にする面白き話說あり今こゝに引かん英國の詩人ボルンス嘗て良妻の事を論じて「その性質を分ち十となす。好性情即ち親愛、四分。善き意見、二分。巧智、一分。美麗顏色眉目好美好貌嫻雅等一分。以上十分の八なり。引き殘りて十分の二なり。その中に妻の產業及びその交遊及び尋常より善き敎育才藝等なり、これは人々各其意に隨ひ之を分つべし但しこゝに注意すべきも

のありこの諸の小部分は零數を以て分つべしこの中何の一つにても全數を取るものあらず」と實にこの盲の如く婦人は第一に好性情を重んず而して百般の好性情は一愛に本つき生す、所謂る深愛あるものは必ず和氣あり和氣あるものは必ず愉色あり愉色あるものは必ず婉容ありと云へるが如く諸善從つて生しこれよりして才智も生じ大事も成し得らるべきなりこの好性情の母を得て絶好の兒子を造らんとは吾が前にいへる現今人民の性質を改造するより容易き業なるべしいかにして胎敎を善する母を得んや即ち吾が畧ぼその端緒を此一小話說に發するものなり讀者深長に思はんことを冀ねがふ。

〇櫻花は爛熳たり

櫻花は爛熳たり一歲の好時期恐らくは今日か明日かに限る一年三百六十餘日家政の取締りに窮屈面倒の勞を忍び或は勞れたる良人を勵まし或は泣ける子供を慰さめ反つて其身の大に疲るゝと大に悲しきとを忘れ日又日、夜又夜、たゞわくせくとして働かれたる同胞の姊妹諸君、希はくは今ま出てゝ此の櫻花を觀以て不斷無限の辛勞を洗はるべし。

そも〳〵人世は古人が歌に詠じてうき世と爲し其浮沈定めなきを水鳥の平和安心なるにだも若かずと觀じたる所ろ也若し一度び觀ずれば万象ほとんど果敢なきが如く一度び悟れば万物ほとんど空に歸するの思ひあり然れど斯る觀念悟道は此の快活なる櫻さける世界に於て姊妹諸君に望むべきにあらず吾人は今ま諸君に只だ注意し參らすべし即ち櫻花は爛熳たり而して此世は櫻らの咲くべき世の中なりと忠告すべし。

見たまへや地中に熱火沸々たれども高山の巓きには之を洩らすの火口あり、雨霏々、水滔々河水は大に漲ぎれども亦之を容るゝ大海あり、人世何如に事繁くして何如に心配多からんとも吾々には亦た其の憂ひを散らし其欝を晴らすの塲所なかる可らず而して愛の眼を開らひて之を觀れば現に世間には是れ限りなきの美限りなきの樂しみあるぞかし。佐野の渡りに貧しき家あり軒には雨漏り床には布ける疊もなし廐に繫いだる馬は秣草に足らずして瘦せ棖押に掛ける長刀は塵も拂はず見へぬ然れど此家の主人は梅、松、櫻、を殊の外に愛でゝ其の不平をば全く忘却したり。

左れば吾々も此の爛熳たる櫻花を觀て亦た全く憂ひなきを得るなり旭日霞を拂ふ朝た春月おぼろ氣に見ゆる夕べ吾人櫻樹の下に立つて徘徊すればほとんど是れ幼な子の如く只だ花を眺めて其美を歎ずるなり花の衣裳雨にも濕ずべし白毛の帽落花

をも戴くべし落花にも吟ずべし雨にも咏ずべし。

○過去はなし（其四）　高橋おろか　記

吉彌結起り初て漸く後結びの始まりたれども未だ舊慣になづみて一般改まらざりしと見えたり女重寳記（元祿九年）に、大ちらしの染帯長さ八尺にして前結びこれ今のはやり風なりとあり又同八年板行師宜が百女圖に前帯なるが多し又此時かゝへ帯あるもの流行せしと見えて雛袖の海に、花色しゆすの二ッ割紫縮緬のかゝへ帯云々（かゝへ帯とは今いふしごきの腰帯なり）此事俳度曲にも出たり春臺獨語に、婦女の帯は金襴を美麗の限りとし黒地に梅櫻松を處々ゑ織付て是を鉢の木帯と名付て珍重しけり廣さわづかに鯨尺二尺ばかり紙を心として綿など入るゝことをなし四月より八月まで婦女の禮服に綿にて廣さ鯨尺の八歩ばかりなるを後に結びて垂るをつけ帯といふ今のつけ帯は昔の常の帯よりも廣し（中畧）我まのわたり見しとなり云々春臺は鴻儒にして信州飯田の人なり經術を以て著はる延享四年六十八歳にて歿すとあれバ元祿より享保年間の風俗を陳たるものなり又産業袋に享保のころを云へり、帯地類は繻子、（島無地）紋賢、あるひは博多、とび金入、色糸入、さつま織、小石織、市の屋織、云々中に紙を入れて用ゆ凡て六寸幅なれバ仕立は三寸足らず是昔の常の帯幅なり云々是らに因バ元祿以來其幅過半狹くなりしが如し然るに又元文に及びては少く廣くあれり衣食住記に、帯は元文ごろ丹後、琥珀、晝夜織にて其幅四寸五分云々夫より寳暦に至りては黒琥珀、縞眞田行はれ天明には緋博多、緋緞子專ら流行せり當時腹切帯と稱へしは是也其後のありさまに於ては草雙紙、錦繪に付て往々見玉ふを以て余が申す迄もなく既に御承知のと爲べし夫れ帯の全く後結びにありしは徳川氏の季に變じたるが如し元祿には未だ前結びたること前文ゑ因て明かならん然れども吉彌結のみ早く後ろに結びし事と見えたり天明の頃に至りては他の結方における後結びにしたるが如く其圖繪本譬喩節（天明刊行）噂を云は蔭がさすと云る圖解に出たり（二人は前結び兩人は後結びに畫きぬ）此判斷に苦めるを以て或老人に問しに、我天明の風俗は知ざれども昔前結にせしこと珍しからず凡て儀式のときは何なる理か夫ある婦女は前に結び嫁らぬ者は後に結びぬ是れ天保このかたのお話なり云々此答につきて考ふれば後結びの婦人は前結びの者より些しく若き畫風あり然れば此時代に於ては既に後結びのと若き婦人に行はれて細君にのみ古風を存したるなるべし然るに文政（紀元二千

四百八十年）に至りては一般後結びとなりたると見えて豊國が畫ける時世粧の圖に於ては前結びの者なし然れば現今の帶は幅と云ひ結方と云ひ此時の遺風なると近代の諸書によつて明亮なり

以上陳たるが如きは余が卑見のみを記したるものにて固より詳細ことにはあらざれども其沿革を見るに強ち益なき事にもあらざれば春の夜のあけやすきをも思はで斯なが〳〵しく記し畢んぬ（結）

○婦人方に限る者　　是空子

當今の御時世と相成り、さま〴〵の不思議を伺ふもの哉。先づ男女同權と云へば、男も女も權利が同じであるとの事、即はち男女ともに同樣と申す。次に女丈夫と云へば、女で大丈夫の樣だとの事、即はち女にして男に似たので、男女ともに同樣と申す。昔しは男女七歳にして席を同ふせずと云つて、暫時の座はる間だにも相違があつたに、今では出るにも男女相ひ手を引き、踊るにも男女相ひ抱き、名札にも夫婦の名を一つにするようにに成つて、万事に男女の區別なし、即ち男女ともに同樣と申す。箇樣に追々と男女が同じ樣に成り行けば、此先き幾年の後ちには、抑もや何如よふにか爲るべき、遂には男と云ひ女と云ふの區別が、全く無くなりはせぬか、甚はだ掛念せらるゝとである。

ダルヰンと云ふ學者が申すには、物の始めは男女雌雄と云、區別がなかつたと論じます。例へば一本の鐵に陰陽の兩性がある如く、元とは一物に兩つの性を備へて居つたが、年代と共に進化して、遂に今日の如くに成つた。夫故へ、今日の男女でも、細かに吟味すれば、自づから其名殘を存して居る。先づ男にも乳がある、女にも男に似たる一種の器械がある。大古しは今よりも多く男女が相似て居つたるが、段々と進化して、段々と變化し、則はち段々と兩性間の相違が廣ろく成つたと云ふの論です。左樣ならば、世が開らくるに隨ひ。年代が過ぎ行くに隨ひ、男女の區別が追々と明白に成るべき筈と心得たるに、或は男女同權、或は男女同席、或は女丈夫、男婦人などゝ云ふように、追々と男女が一つに爲るように見ゆるは、何如の譯なりや、ダルヰン若今日の日本に生れなば、退化論を申しませうか、是れ亦た、甚はだ掛念せらるるとである。

是空子大に心配いたし、男女の一つとあるは、陰陽の混ずるのである、陰陽相侵すは、易にも宜しからぬように見へ、進

（一四）

化論にも相濟まざる次第に、何がな左樣の事を致させないやうに、一臂を揮つて、狂瀾を返し、大黑柱を既でに倒れたるに起さんと志を立て、密室に香を燒いて、沈思默考、坐禪する二日にして大に發明せり、男女は決して〳〵一樣には相成らぬ、其間だには深き谷が在る、此處より彼處へは渡る可らざる大ひなる境界がある、左樣に心配せずとも、未來永劫、男女の同樣と成る氣遣ひなしと、大に發明したり。何故へに斯く迄で、豁然として悟道を得たるかと申すに、男女兩性の間に、大層の相違あることを發見したる故でありまます。

即はち婦人方に限る所ろの色々の性質があつて、是れは決して男にあるまじき、一種のパテントである、此の專賣免許のあらん限り、丈夫決して婦人の領地を侵す可らず、婦人決して男子に混ず可らず、常迄も陰陽畫然として分れ、男女到底判然として區別せらるゝとと信ず。曰く、女の淚。曰く、女の笑。曰く女の癪。曰く女の髮の毛。曰く世辭。曰く心配。曰く愛情。凡そ此等のいろ〳〵の者は皆な男に無く、若しくは少くして、但だ婦女子に多きもの也、故に此等の者あらん限り、男女混合に付ての憂ひは全く無用ならむ。(以下別項)

○百人一首一口話　(五)

鈴木弘恭講
八木鶴二記

猿丸太夫

をく山にもみぢふみわけ鳴鹿のこゑきくときぞ秋はかなしき

此の歌はこともなくいひなされたる歌なれど。餘情深く聞ゆるなり。暮秋のさまを能くよみなされました○おく山は端山に對しておくといふ〳〵○もみぢはもみだんもみぢもみづもみでと活用する四段言にて。何木にても色の赤くなりたる木葉をいふなり。然るを後世は楓に限ぎるやうに思ふは誤りでありまます○一首の意は。秋といふものは哀れなるものであるが。ことに暮秋にありて。奥山に散り敷きたる木の葉を蹈み分けて妻をたづねつゝ鳴く鹿の聞を聞く時が限りなく秋は悲しいものである。といひて餘情をこめたるなり。語格は。一段切れの歌にてときぞといふぞが指辭にて。かなしきといふしきにて結べる格であります。

小說

○都鳥　　石橋忍月

第二回　塒失ふ親なし鳥　(下)

蛇の目にあらで蝙蝠の、絹の肌や溝骨も凍る計りの寒空に、開

いてすぼめて相合傘の袖と袖、雨や雪霜降らばふれ〳〵、濡しはせじと一節に恩義を思ふ乙女の眞心

乙女　イヽエ其お荷物は妾が持ちます

と車を降りて福島停車場の中等待合室に這入る

乙女　モシ郎君お手はひどく痛みは致しませんか、けふは寒さが強ふ御坐いますから、アノ昨日お醫者樣が風に觸れては惡いとお仰りましたから何ンなら是を

と自分の持ッたる毛糸の肩掛を紳士の左手にソット纏はせて

乙女　嘸郎君は御不自由で、イヽエ切符は妾が買ッて參ります、郎君此處に御休息なすッて

と椅子に毛氈を敷き暖爐の前に直し帶の合目より卷烟艸を出し渡し燐附木を磨り附けて

乙女　ハイお火を

と言ひつゝ切符を買ひに行く、跡見送りて紳士は「有難ぞや何にも言はぬ」と言さうな氣の毒顔、心の中では「世間知らずの、年葉もいかぬ生娘に、よくもソンな娍しい、健氣な所置ぶりが、ハテ吾儘で、ヤンちや娘に育ッのと氣兼苦勞の裡に人とおッたのとは大層な懸隔だ」との感歎、乙女は暫くして戻り來り

乙女　ハイ是れはけふの時事新報、今お讀みなさいますか、滊車の中でが宜う御坐いせう子

紳士　モウお八重さん何にも搆ッてお呉ンおさンな、アレ御覽、皆な男が、カバンでも傘でも持ッて婦人を扶けて護ッてゐる、それに私は却ッてお前さんに

乙女　ホヽヽ人樣は如何でも宜しいぢや御坐いませんか、妾はアノ何ですけれども女子の僻に殿方を勿躰ない妾はソンな、ソンな生意氣な……

紳士　左樣ぢやないけれども子、女は外に出れば手寄に思ふは男計りそれに却ッてお前さんは此厄介人を負擔ッて迷惑だらうと氣の毒に思ッてサ

乙女　ハイ嘸かし御厄介で……御迷惑で、妾も氣の毒な事は万々知ては……と言て何處へも行先が……何卒御迷惑でも

と曇り聲、擡た頭を又指俯き、濕みし目元をソッと襦袢の袖にて拭ふ、縦令偕老の契は結ばずとも、縦令見初し月日は淺くとも妾が爲には十稔昔時の舊知にも優るぞや、生みの親の其次に大恩あるは此君ぞや、實有り色有り情有り義ある君との交情は阿武隈川の流よりも長かれよ、猪苗代の湖よりも深かれよと祈る心の淸潔を知るや知らずや岡目の品評

今朝宿屋を發足時寒さ凌ぎにビール五六本浴て、金時宜くと

言ひさうな町人躰の一連
チイ、定さん燒るちやあエか、あの若夫婦は「うしや櫻の顏隱す霞を拂ふ春風を仇とは誰が言ひ初めて草のはつかに解紐の結ぼれ合ひし朝寐髪しんきらしいも命かや」と言つた位なもンだ、どうだ彼女は只者ぢやあエぜ、チエ定さん「何とかの癪は誠の置所世界の客へ虛言もひとりに盡す眞實の戀の中だぜ
ソレにしちや年が餘り若エぢやなエか、男の方は手を怪俄してゐるンだぜイ、氣味だと自己は思つてゐるが彼女なとんなにか可愛さうに思つてゐるだらう、「チヨイト郎君お手は痛みは致ませんか、」ヘン畜生め人を馬鹿にしてゐらア、自己樣だツて、東京の空では「留守は猶更女氣の獨くよ〱物案じ、夫に怪俄のない樣に」と、ヘン祈ツてゐる奴が二三人は有るぞ、モシこちの人さまよチイ、よい女房と戯れの……ア、痛いおツそろしい頑固な手だ、彼女の手の柔かさ、じんじやうな事鳥渡見な
徘徊の宗匠めきたる合羽を着けた圓頭の老人、桑折の方より來る滊車を待佗びて野面を眺め乍ら獨語
咲た櫻になぜ駒繋ぐ、駒が勇めば花が散、ア、梅が大分亂れ

かゝつてゐるわい

折から發車を報ずる鈴の聲チリン／＼／＼構内の衆人ドット一時に立ち上つて車上に登る以前の男女も群集中に紛れて其形を失ふ

今迄假りに紳士乙女と名のらせたるは既に第一回に於て讀者とお馴染なる園井波之助とお八重孃（姓は小名濱）なり茲處にて鳥渡兩人の容貌を說明せん

波之助は顏稍長くして色白く鼻尋常なり二重眼栫の眼淸かにして眉濃し丈け餘り高からず齒並には少し申分あるも其口元に頗る愛敬あると言語の圓滑温和なるとを以つて之れを補ふに足る先づ總躰より論ずる時は上品なる人柄あり序に謂ふ波之助は京都府の平民にして當時東京上野花園町に寄留し某高等學校に通學して經濟學を研究する者なり此冬（即ち一回の出來事より四ヶ月前）二周間の休暇を得たれば歳末年首の面倒を避けんとて水戸街道より猪苗代、鹿坂近傍を漫遊して三春より福島に入らんとて寒夜を侵して來れる途中彼のお八重の難を救ひしなり、そは滊車にて歸京せしより二日前の事にして其節賊より左手を劇打たれたる爲め二本の指は骨碎け爲めに用をなさずと云ふ

お八重は背は少柄の方にして身躰程善くしまり、豐圓の顏玲瓏なると珠の如く大ならず小ならざるの眼涼くして黒點多し其微笑する時に當つては眼波一轉の間に忽ち光彩を增し恰も草露一滴旭日に輝くが如し口元にこやかにして眉毛の撓み鹽梅、濃に過ぎず薄に陷らず、特に作者がお八重の亡毋に代つて人々に吹聽せざるを得ざるは兩頰に湛えたる生殺與奪の權を有する笑靨と生髮の富士額を書けるとの二點にぞある之を總評して雨中の海棠と言はんか出水の芙蓉と言はんか將た迎風の柳と言はんか只物足らぬ心持するは品格の高尙を缺くと音聲の低きものとなり然し之をしも意ある眼より見るときは却つて可憐楚々の趣ありと言はん歟（お八重は如何なる境遇を經過したる身の上なるやは後々に分る）

○小說神髓

蘇格氏著ケ子ルヲルス　（第十回）

斯て之れより議事室に移り陛下は兩侯と共に彼の七年間囚らへ置たる蘇格蘭の女王メリーの取扱ひ方に付て相談ありサッセックス侯は之を釋るさんと云ひレスター侯は陛下の意を迎へて更らに之を嚴しくせんと云へり則ち議陛下の御意の如く定まり之れより衆と共に水遊を爲さんとて御出ありぬ。

レスター侯は今日パーチーの計らひにて思はざるさま〴〵の欺むきを申し彌よ以て陛下に我が內密の事を隱くし宙に之を隱すのみか最早取かへしの成り難き程に之をつくろひたると今となりては遺恨遺る方なし嗚呼朝殿の榮華を思へばこそ斯迄に心を卑屈にし斯く迄に貞心を苦しめ身に錦を衣て高官大權を握りながら心中の苦しみ斯く迄に在らんと何たる不幸ぞ寧ろ斷然万事を公けにし官は奪はれ身は退けられ只だ一匹夫と成り下るとも日に彼の佳人と樂しんで洋々自得せんか嗚呼抑も何如にすべきと煩らひ居りぬ、斯くとは知らず數多の人〴〵今日朝廷に於てレスター侯への御覺へはサッセックス侯にも優れりと云へば此の君の好意を得置かずば出世覺束なしとて代る〴〵出で來りて樣々の世辭追從を言ふ實に人間は果敢なきものなり。

水遊すでに畢り陛下は恙がなく還御ありまた〳〵兩侯を初めとしてラレー、トレッセリアン等を侍べらせ晩餐を賜はる晩餐も濟みて人々宮園を逍遙するときトレッセリアンを尋ねて彼のエーランド出で來り顏色青ざめわな〳〵と震るへ連りに後しろを氣遣ひて息氣を切り居るにぞトレッセリアン之を怪しみ抑も何事の出で來れるぞと問ふにエーランド吶りながら漸やくに口を開き兼てお話し致しました舊の煉金術の師匠デメトリアスが彼處の塔の隣りの窓より顏を出し下を眺めて居りましたるを偶と見付ました彼れは私を惡くみ是非とも私を殺さんと思ひ居るように思はれますれば迚も此邊に落附ては居られませぬ私が何如ほどに逃げ廻はり何如程に考へましても中々あの師匠には及びませず又彼れは甚はだ執ねきものゆへ一旦私を殺ろさんと思ひますれば是非とも殺さずには置きますまじ夫故之より御暇まを賜はり早々遠國へ逃れて師匠に近づかぬように致したし何卒只今より身の暇まを下さるようと願ひ乍らも氣を兼ねて一刻だも安んぜざる如しトレッセリアンは打ち笑らひ斯迄に恐ろしくば致し方なし然らば一層彼のパークサイアに行き旅籠屋の主人に會つて賴み置いたるラブサートの身の上何如んを聞き汝ちも其邊に居て隱ながら之を保護せよ夫にしても此后サッセックス侯の御一身汝ちが居らざるときは亦た何如ある事のあらんも知れず常々何如が致して宜しからんやと案ずるにエーランドの言ふよう之れも御案じ申さぬにはなけれど此后ち始終食物を用心あり凡そお抱への料理人が料理したるものにて而も一應之を試みたるのちならずば差上ざるように致されなば復た前日の如き憂ひも

候はじ今に於て察するに前きの日の御病と云へるは必らず師匠が盛りし毒藥の効に相違あるまじ嗚呼恐るべし〳〵私も此邊に永居せば遂に彼れが手の中に掛り申すべし左らば御暇たまわりぬとや之より御別れ申さんとて前後も整はぬ別辭早々早や後をも見ずして驅け行きたり。

佳傳

○メリー、アン、ガルトン（其三）　Mary Anne Galton.

（九歳より廿八歳までの來歷）此間他より受けし感化は實に多くして一々數へ擧ぐべきことにあらざれば只其人々の以て主義とし以て感化せし言葉を述べんに幸ひメリーの自ら言へる事あり「吾が母上はこれは貴としこれは外面の事にあらで實に善き業なりと賞め玉ひ父上は實に有益と賞め玉へば我友フルスヲルはこれは適當なる事なりと賞し玉ひ我祖父様はこれは賢き方法と云玉ひ我叔父ワツソンはこれは花々敷と賞し玉ふ又從妹タリスマナは實に美し實に至しと賞め玉ふ」と此等の敎訓に依て受し利益は實に夥しとは云へ當時最も心に動きし感情は人の爲め社會の爲めに其身を犧とせんと思ひ又これを思ふ程尚多く神に似るが如く思ひたり此時母は眞理は凡ての物の中にて最も尊く最も聖きものなるゆへこれを逐ひ求むるは人間社會百般の事業中最も貴く最も慕ふべき業なることを敎へしに斯くせは薄情にやなりもせん愛心に背かずやなど思ひ迷ひ居たりしに生憎母病に犯され安息日の課業もなし難く神に事ふることも自づと薄らぎ薄らぐにつけては迷の雲は彌深くてアワヤ哀なる境界に陷りしが或時云へる言あり神の在し玉ふや將た在しまさゞるや知り申さず善惡の別も付き兼ぬ迷の雲は幾重にも我身を鎖すア、可哀なる我身かな望なき我身かなと打ち嘆きしが何故斯る境に至りしやを考へ見るに元來メリーの家はクエカー派にて定めたる祈禱會もなく敎の會さへも折々の事なるに導く母は病にて身も自由ならねは其身の衰ふるに伴ひメリーの信仰も薄ぎしなるべし。當時メリーの最も好て讀し書物はヒウムの英國史ロリンの古代の學藝とメゼレの軍法書とにて殊にラベターの骨相學は甚しく好所にて自ら土もて人面を摸せし事もあり又二個の骸骨を並て各其生時の履歷を想像せしこともありけり。（結婚後の來歷及其事業）一千八百〇六年ラムポルト、シンメルペンニンクに嫁し一千八百十三年ランセロツ、タワア、ツー、ラ、グランド、カルツリース、アンド、アレツトを著し其十六年にチー、

プモリーシヨン、ヲブ、ボルト、ローヤル、デス、チヤンプスを著し其十五年にシヲリー、ヲフ、ビユチー、アンド、ブホルミチー(聰美の說)を出板し其二十一年にバイブリカル、フラグメンツを發行し其他倘時々小冊子を出板せしが何れも皆文學社會を動かし社會の輿論を牽きたりと云ふ且つ貧民を憐み不幸を助け殊に敎育の事業に熱心にして自ら得し學識を又人に頒たん事を樂とし青年の徒を家に招き百科の學を授け殊に博物學ハ自ら好む所なるをもて一入力を用ひて敎へしと云ふ。

性質情濃やかにして愛深く相憐むの情切にして自ら利する心なく其母に事ふると尤も篤く一たひ訃音に接して生涯これが爲めに愁を結びしと云ふ又良人に仕てハ貞にして誠あり殊に相樂み相憂ふの念切にして實や婦女の範圍は只男の扶助として働くに在りと自ら言ひしが如く能く其言を踏みたり。嫁する後二年にして洗禮を受けメソヂストの敎會員となり其後信仰彌増に加へて將さに死なんとするに臨み喜べしく〳〵吾今父の許に行くと言ひてか暫して又言葉を續ぎ嗚呼聞け彼の聲を小兒の聲の最も高きをと言ひしぞ即ち其臨終の遺言なりけり。

"Good thoughts are no better than good dreams unless they be executed"
Emerson.

寄書

○宮川德子の傳

知人某宮川氏の傳を寄せらる吾人嘗て島田君に因て其賢なるを聞き一日之を見んとす偶ま其病に在るを以て果さゞりしに不幸にして今は只だ其傳に接するに至る悲しひ哉之を聞く德子資性孝友にして且つ節義を重んじ所謂る烈女子の風あり而して其名聞えず其事現ハれず空然として失す悲しひ哉然れども是常あり人 希くは天を怨む勿れ　女學雜誌編者

宮川氏名は德子故との奥州白河の城主阿部侯の臣宮川保興の第二女なり元治元甲子の年を以て侯の支領羽州山野邊の陣屋に生る二歳にして母を失ひ五六歳に至るまで他家に養はれ後家に歸りて姉直子の覆育を受く其漸く長するに及んでや孝友の心深く鄕黨皆な之を稱せり明治維新朝廷藩を廢して郡縣の制に復し士皆な常職を解かる是に於て家計日に窮す德子坐なから之を見るに忍ひす父に請ふて白河製絲會社に入りて工女と爲り賃銀を得て以て自ら生計を營み且つ其餘る所は苟も徒費せず之を積んで以て父が酒肴の資に供せり會社德子の性行衆に異なるを視遂に擢んじて師婦の任を與ふるに至れり政府の第一回博覽會を上野公園地に開くに當りてや其兄保之出

京して之を縦覽せんと欲れ共旅費の支辨し難きに苦り德子之を聞き其貯る所の賃銀を給して以て其望を達せしむ壬午の冬改進黨沼間守一牟田口元學等北國に遊ひ途白河を過ぐ德子師婦門馬淸子其他數工女と共もに金若干を贈りて以て其邦家に盡すの勞を慰めり淸子は舊相馬藩士門馬那經の二女あり其兄尙經東京に留學し歸省の途次白河を過くるゝ當り之れに說て曰く令兄年長すれども未た良緣あらす幸に妾か導く百餘の工女中斯かる婦女あり是れと緣を約し他日令兄學成るの後之を迎へは如何んと德子を勸む尙經之を諾す尙經は改進黨員たり其後福島縣に彼の自由黨河野廣中等の事件起れるを以て縣廳深く政黨を忌めり時に德子の親戚某縣吏たり德子の尙經と緣を約したるを以て嫌疑の其身に及はんとを恐れて之を近けす德子退て人に語て曰く妾一旦人と緣を約せり豈に利害を以て心を二にせんやと敢て之を意とせす乙酉の秋父偶々病んて死せり故に其冬家兄德子を東京に送る然れとも尙經尙ほ在學中なるを以て婚儀を行はすして直ちに之を知人沼間守一の許に托す居ると二年餘不幸にして喉咽肉腫病に罹り順天堂病院に入りて切斷の治術を受く其切斷に逢ふや從容自若皆な其女丈夫たるを稱せり院主佐藤進の患者を待つや極めて懇切故に患者及ひ親戚其德に感せり然れとも如何せん病症の劇惡なるを以て復た起つ能はす床に在ると殆んと二百日終に其姉夫國島孟治の本鄕菊坂の僑居に卒す實に亥丁十二月五日なり行年廿四越へて七日其遺骸を青山墓地に葬る德子常に和歌を好む死後其床下より得たる歌に曰く「苦るしさは浮世の常と明らめて心殘さす歸る古鄕」又門馬淸子の訃音に接したる時の歌に曰く「亡き人の遺物ありとそ今や見ん心つくしの文の卷〻」

編者云。人間の成功は長壽に非す高名に非す富に非す權力の熾んなるに非ず靈性至美良心自由常に善を爲して平和安心を得たるに在り朝たに若し此の如くんば夕べに死すとも可なり人世の壽は百年の不德なるにあらずして一日の善を樂しむに在る也。

○文苑

鈴木弘恭大人撰

春駒

うら〳〵と霞めるおくや牧ならんいばゆる駒のこゑか聞ゆる　片岡　君子

同

いとゆふに引かれて遊ふ春駒のこゝろやいかに長閑かるらむ　丹羽はね子

朝鶯

朝ぼらけ園もゆか〳〵梅か香の匂ふのきばにうくいすのなく　廣瀨すゑ子

同

むら雀きなかぬさきにをとつれて夢のあととふ鶯くひすの聲　古宇田淑子

野若草

もろともにあさりて摘もうれしきは千代をふる野の若菜なり鳧　松野　鐵子

同

のどかなる春の野に出て思ふどち若菜摘つるけふのたのしさ　秋元　澤子

野若草　永井　鍈子
うらわかきを野の若草萠にけり子らは母こをしたひてや摘む

垣若草　跡見　桃子
日かけさす垣ねは雪の解りめて下もはいそぐはるのわかくさ

同　跡見　節子
いつのまに色に出にけむ春雨のきのふかふりし垣のわかくさ

窓前鶯　永島なか子
朝まだき窓におとなふうぐひすハ花のねぐらに夜や明しけん

同　石川ろく子
窓ちかき竹にねぐらやしめてけん馴たるふしにうぐひすの鳴

同　朝山とよ子
文まなふ窓のひかりと咲く梅に靜さへりへてうぐひすのなく

同　太田きん子
まど近き梅の立枝に花さへもこぼるゝむかりうぐひすの鳴く

夜春雨　跡見　節子
降雨のおともしづけきはるの夜ハそゞろに物ぞ寂しかりける

同　松野　鍈子
夜もすがらふるはるさめに鶯の花のやどりやしめりはつらむ

同　跡見　桃子
我閨の板間に月のかけきはてもりかはりたる夜半のはるさめ

同　片岡　君子
よもすがらたくりらだきの薫さへいとゞしめりて春雨のふる

同　池田　孝子
風たはてのきなしつけくふくる夜に降る春雨の音ぞさびしき

同　平尾　竹子
さむるともぬるともなきを春のよの夢さへしめる雨の音かな

同　秋元　源子
月影のわきて霞むと見しそらのなごりよりふるよはのはる雨

● 新　報　(此欄内自由に轉載を許す)

○花の薔薇戀の啖分

此頃のやまと新聞に右樣の題にて最と面白げなる物語りあり二日に續きて最と長々と認めある其談の大咊は麴町區飯田町邊の或る女學校の生徒へ向け其生徒供が時々に參る近邊の敎會にて之を見染めたる或る男の子より匿名の書狀を寄せ君も一生が切なる思ひを哀れと思召し先づ西洋風の交際を許し玉へんには一生の幸ひ之に過ぎず然れど初めより打明けて申出で萬に一つ其の願の聽かれざらんには生が遺恨亦た之に過ぎず依りて先づ思ひの丈を申す若し之をきゝ玉はゞ次の日曜日會堂に於て赤き薔薇をかざし玉へ若しすげなう否み玉ふとも切めては白き薔薇を挿して其の御答への由丈けをば知らし玉へとなり然るに無名の書狀なれば幹事校則によりて之を開き見るに斯の如し此事全校の大評判となり只だ哀れなるは當の孃君にて彼此と言ひ囃されて當時大ひに迷惑し居らるゝよし云々とあり」少と小說らしき書樣なれども飯田町の女學校とは明治女學校の外になし而して同校は吾社と緣故少なからず兼て其の校の目的と其校の敎育主義とに付てハ吾社が厚く賛成を表するものに付き斯る所白からぬ評判を聞ては棄て置がたく此頃ろ其校を取締らるゝ人に就て之を聞けば、其人大に笑つて頓着せず先づ斯る事の有るや無しや吾校内の人々に聞くべし誰とても暖耳にだも左樣の談しを聞かねば況して校中の大評判など云ふとなし只今ま初めて新聞に左樣の事ありと承知して皆々新聞屋の探報の當に成らぬ實證を笑ひ居る計りなりと言へる。吾人は明治女學校に於て斯る小供らしき批難を辨ぜられざるを尤もなりとは思へ女學全咊の進步上よりして一言なき能はず變きに公論新報の婦人矯風會に於ける今ま亦た此のやまと新聞の明治女學校に於ける如き跡も無き事を大造に書立てゝ洪局善事の進步を害するに至らば新聞記者たるものゝ功德安んか在る愼しみても尙ほ愼しむべきは記者が墨汁を落すの當時其の筆端に注意すべき事なりけり。

○女學校の試驗、春期の休業

此頃は何處の女學校にても春期の試驗が濟みて春期のお休みあるべし則ち學校の幹事方と生徒諸君とに一言の注意を呈す。そもく試驗は餘まり効能のあるものにあらず反つて種々の弊害を生することとあり偷更ら女性の如く競爭の强い方には之が爲め不測の害を其の衛生上に及ぼして學問の進步には實際左程の利益なき趣きもあらん因て幹事諸君先づ能く試驗の効能は何如ほどなりやと考へ扨て其試驗を爲すには成るべく實際に學力を增さするとに効あるようにてたゞく暗誦したる所ろを復讀せしむるような試驗を爲さぬよう覺悟ありたし今に於て之を考へ置くは次學期の爲に大切なり。又生徒諸君はお休みの間だは十分に休み玉へ遊ぶ時に遊ばぬ人は即はち勉强する時に勉强せぬ人なり小學校の小供を見よ運動時間が無くば迎も一時間の學問は出來ぬ此の運動時間を無にすれば則ハち勉强の時間をも無にする譯にて詰りはブラリく不活潑にして事も爲ず始終ノベツに遊ぶ人也夜眠れば晝は眼が開く此のお休みに休む人は後ちに勉强する人也。

○日本婦人の洋服

日本婦人の衣服は固より多少改良せねばならぬ然し之を純然たる洋服にするの不便不利益なるとは吾人が兼て切論する所ろ女學雜誌第五十三號等を一覽せられたる方々ハ詳し承知なるべし然るに之に賛成の方は本邦に少くして外國に在り外國の人々ハ大抵吾人と同樣に洋服採用の議に不同意を表せらるゝと見へたり故に同志社女學校の敎師たりしパルマリー孃は此頃日本婦人洋裴非難の勸告書を作り米國大統領夫人ガーフヒールド夫人ウイルラルド孃等の賛成を併せて近日其書を當方へ送り越さるゝ由なり而して別にイーストレーキ夫人よりも同樣の論文一篇を寄送せられたり何れも後號に謄載して讀者の注意を促がさんと欲す。

○養育院慈善會　來る二十日より開く同會へ皇太后宮女官より二十五圓皇后宮女官より五十圓寄贈したりと又同會長へ高崎五六氏の夫人副會長は澁澤榮一氏の夫人議定員は岩崎彌之助橋本綱常穂積陳重堀田正養大倉喜八郎渡邊洪基渡邊孝芳川顯正高嶺秀夫梅浦精一山尾庸三松平定教小島信民青地四郎左衛門三島通庸鍋林綱男三井三郎助諸氏の婦人なりと。

○東京舞樂會　去る二日同會の踏舞會を開かれし由此頃同會は何故か出席婦人の僅少になりて中止したることなどもありし程なれば二日の例會より歐洲樂を加へ婦人方の出席を促したるとのことなるが如何なる必要を以て勸說せられしやを知らざれど兎に角吾人は其勸說の多少は無効に歸せんことを信ずるものなり。

○演藝矯風會　去月廿六日午後四時より日本橋區中洲枕流館にて同會の第三會集談會を開かれたり出席員は渡邊洪基加藤弘之福地源一郎田邊太一澀谷一六瓜生寅物集高見岡野碩谷茂實森田文藏元田直諸氏演藝家には市川團十郞を始め有名の音曲家講談師落語家等三十餘名にて瓜生氏該會設立の主旨を述べ加藤渡邊其他二三氏の演說あり又以來雜誌を發行し會員に頒ち席を定めて矯風演藝をなし漸次惡弊を矯むることに略ぼ決定し散會せしは午後十時頃なりしと。

○女子職業學校　先般森文部大臣が同校を巡覽ありし時生徒の手製品を一覽して其進歩を感賞せられ該品の內數種を皇后宮の叡覽に供せしに御留置の上金二百圓御下賜相成り此金を學校資金の內に積立て利子を以て優等生徒を奬勵すべき樣文部次官より同校長服部一三氏へ達せられしと云ふ又來廿二年佛國巴里府にて開く萬國博覽會へ生徒の製品を出品せんとて陶器畵蒔繪縮緬物等の製造中なりとのこと。

○美術展覽會　上野公園櫻ヶ岡の日本美術協會にては去る十日美術展覽會開館式を執行し十一日より諸人に觀覽を許せり。

○女生洋行　東京築地女子講習所の中村やす子は本月中旬に米國桑港に航し夫より紐育府へ赴くと云ふ。

○平河女學校　今度麴町區平河町四丁目十三番地に新設になりたる平河女學校は明十五日開校する由にて小學卒業の女子晩學の婦人に英語和漢學日本裁縫編物等を敎授し專ら實用を旨とするものなりと云ふ同校は宗敎上の關係なしとて特更に廣告せられたるが近頃寄しきことにぞある。

○大津婦人慈善會　滋賀縣下大津にて去月廿四日婦人慈善會を同地商工會議所內交道館にて開き今度近江婦人慈善會と改めて此れまでの名譽會員世話掛等を廢し別に各郡に役員を置き益々同會を擴張する由又役員の改撰を行ひしに會頭に中井婦人副會頭に園田夫人戶原婦人當撰せりと云ふ。

○吾妻婦人會　群馬縣東群馬郡中の條にて去月二十日原町精糸會社の樓上に同會の發會を開き來會者は十二ヶ町村の婦人四十五名にして會頭山口某子及二三氏の演說あり後ち毛糸編物西洋料理法育兒法等に付き互に談話し午後二時始めにて六時に至つて散會せりと。

○女子部茶話會　新潟師範學校女子部に於て去月十七日春季茶話會を開き婦人懇親會役員職員夫人同部卒業生及びスカッター女史等を招き生徒の談話教員の講談あり畢って男子部寄宿舍を參觀したりと。

○婦人令德會　前號にも一寸記せしが佐賀有志婦人の協議にて婦人令德會なるものを設け十三歲以上の婦女子は何人にても入會を許し會費を要せず會則を定めず唯佛敎を基礎として婦德を高尙ならしめ相互に親愛するは勿論敎育技藝の研究をなし風俗情義の矯正を目的として盡力するものなりと會員五十餘名每月一回集會をなすよし第一回を去月第一日曜に開き會員中編物裁縫品或は製作物を貯集し其賣拂代金を慈善金として貧者へ送り又は會員中冠婚葬祭の時に於て之を贈與する等種々の相談ありし由。

○藤岡婦人會　藤岡有志者の組織されたる婦人教育會は佛敎主義を以て成立ち會員も百六十餘名の多きに達したれば前橋、高崎、安中、上毛の婦人教育會と聯絡し以て大に婦女教育の面目を一新せんとて去月廿五日藤岡金光寺に於て發會式を舉行されたるに前橋よりは千谷判事の夫人令孃土屋學務課長の夫人飯塚收稅長の夫人中岡判事の夫人其の他紳商方の夫人また高崎よりは私立學校長梁瀨忠方氏幹事深井仁子の刀自高崎婦人會員を率ゐて來會されしに藤岡町の入口には二百餘人の婦人會員出迎へて會場に東道し午後一時に有志賛成者たる草香唯道氏開會の趣意を述べられ次に前橋婦人會員幹事千谷貞子の祝詞あり次で千谷松子、染谷福子、水野美代子、屋代綾子、高崎會員宗岡豐子、金井芳子、深井仁子等交るぐ演說せられ夫より吉田軍平氏婦人總代として答辨を述べ續いて賛成員梁瀨忠方氏前橋清揚女學校英學教師川本恂圃、立花深遠、磐井宗成、小野島諸氏の演說あり式全く終りしは午後四時比なりと茲に人々の最も感ぜられしは埼玉縣熊谷監獄署なる西村看守長の夫人が當日開會式の舉あるを聞き態々來會し婦人會の實況を視察されたる一事にして該地にも斯る婦人の會合を起さんとて懇篤に諸般の打合せをされしと（一一六號上毛新聞）

○京都看病婦學校　本誌第百三號の紙上に同學校には京都婦人の入學者一名もなき趣記るせしが同校教員にならんと京都の婦人一名入學し今は暫時生徒となりて英學研究中の由又生徒の員數を四十餘名とせしが之れ又誤にて寄宿生十三名通學生一名なりとのことなればこゝに正す。

○女況叢報　東京師範學校女子部にて來九月の卒業生に去二日證書授與式を行ひたり○金澤にて四月十日より卅日まで新古美術會なるものを開くよし○福岡縣早良郡庄村婦人會の第二例會を去月二十日に開きたり○福岡婦人會は去月十八日例會を開きたり○福岡縣竹野郡田主丸にては婦人協會を設立して去月十日初會を開き追日盛に赴けりと○信州松本の基督信徒婦人は先達てより每週一日敎會に集まり毛糸の編物をなし布教の資として教會に寄附する由又編物を學ばんとするものには何人にても教授すると云ふ○越前福井に於て去月十五日女子佛敎演說會あり會場は西御堂町照護寺にて非常の聽衆ありしと演者は皆十四より廿二三の妙齡の婦人なりしとのこと。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○子供のはなし

小娘と蝦蟇

或る金持の小娘裏の花園へ出て指に差しておりし金の指環をぬき投げ上げつゝ遊びて居りましたにフトあやまりて其指環を井戸の中へ落しましたモ少し大きな物なれば錨でとれますなれど小さき指環の事でありますから中々とれません小娘は指環がとれないとて井戸側に立ちヂダンダ踏して泣ております時に一匹の大きな蝦蟇が出て來まして小娘に向ひツー泣きヤシヤルナ若し私の願通りにしてくるゝなれば其指環を取り上げて進ぜんと申しました小娘は若し指環を取りてくるゝなれば御前が望む衣服でも靴でも何んでも差上げるからドーゾ取りて下されと申しまするを蟇はイヤ私の願ふものは衣服杯ではありません只あなたが私を愛してくれ同じ膳にて食べ同じ室にて眠らせて下さることでありますと答へました小娘は其は何よりも易ひことだ屹度其通にしてやるからドーゾ其指環を取りて下されと申しました其實はドンナ事を云ふも彼は蟇であるから大丈夫トテモ水を離れて我家へ來るまじと思ひましたからでありますサテ蟇は其約定を致しおきまして直ちに水の中へ飛び込み暫しして金の指環を銜へて出て來ました小娘は喜び禮をも十分に述べずして我家さして歸りました蟇は後よりオイ孃樣暫し待ちて下され私はソー早く得走りませぬからト云へど回顧もせず一目散に走り歸りました晩方になりまして家內打ち揃ひ夕食を致し居りました時誰やらん孃樣々々と頻りに戸を叩く者あり小娘は走り出て戸を開けまするど最前の蟇が居るものですから驚き其戸を閉て色青ざめて內に這入りました父は何か化物でも來りしやと問ひましたに小娘はイヤ化物ではありません蟇が來たのでト申す折又劇しく戸を叩き孃樣々々最前のお約束をモお忘れなされましたかと云ふ聲がするサテ何の約束ぞと父は更に小娘に問ひましたに小娘は彼の指環を落せしことより蟇の云ひしことと並に其指環を得しとを申しまして且つ彼は蟇の事であるゆへ決して水を離れて我家へ來るまじと思ひしゆへ約束を致したと申しました父はソーユウ不信の事をなしてはいかぬ約束通りに茲處へ呼び入るべしと命ぜられましたから致し方なく蟇を呼び入れ己が椅子の側におきました蟇は用捨なくサーあなたの膝の上へ上て下され私は脊が低ひから膳に手が届かぬイヤ其皿をモ少し此方へよせて下され私もお一緒に食べますからと憚もなく申します小娘は實に厭やろうなる躰をして苦しろうにして居ますれ

ど約束なれば致し方なく其云ふまゝにしておきました追々蟇は滿腹したと見へヤヤ疲れました今より直に寢ましようサあなたの絹蒲團の上へ連れて行きて下されませと申しまするを小娘はモ溜らぬと思ひシクシク泣き始めました父は怒りたる顏をして已が入用なる塲合において約束をせしことは何にても屹度其通になさねばならぬと叱られましてシブ／＼蟇を連れて自分の室に歸りました先つ蟇だけを入れおきて自分は外に行うと思ひましたなれど蟇はイヤ蒲團の上へ寢してくだされさなくば父上に告げ參らせんと叫ぶものから據處なく心地わるくも自身の蒲團の上へ寢さしまして自身は其側に座りておりましたに蟇は頻りと蒲團を引き被りまして暫し立まするど足が勞いから少し揉みてくだされと願ひますイヤイヤながらも揉みてやらんと蒲團を取り上げまするど今まで蟇と思ひしは間違にて其形は餘り驚きたる時なれば明かに見へざれど老たる人の如し聲和かに申すやうわれは小兒の神にして常に小兒を育て小兒を守り又小兒を敎ふる神なり爾は年倘ほ幼なけれど常に虛言を言ひ親兄弟を欺き友達を欺くと云ふ事既に我耳に達したり虛言を吐く程惡き事はなく人を欺く程罪なる業はなしもしこれが積りなば人の物をも竊むに至らん誠に恐るべき事なり我小供の國におきて虛言は第一の禁制にして虛言を云ふを第一の惡事となせりされば今我は爾が虛言を言ふを聞き捨ておき難き事とおもひ曩きに身を蟇にやつし爾と約束を結び爾の指環を取上げ爾に返せしも皆爾を矯めんためにして後爾の家に來り無理に爾を煩はせしも全く爾を正さん爲めなり然るに爾はイヤイヤながらも倘ほ其約束を全くせりこれ我が滿足して躰を爾に示すゆへなりこれより後順正しくすれば我は必ず爾に幸を與へんと申されまして小娘は大に已が惡しきことを悔ひ泣ながら實躰に禮を述べ父に告げんと室を出て父を呼ひて其室に歸りましたに最早小兒の神は去り玉ふて影躰もなく只枕の上に光るものがある見れば金の指環なり何やら付てある能く見るに爾が後悔の程慥に見受けたれば其賞としてこれを爾に與ふ倘心を正ふして父母に事へ友達に交りなば一層の賜を與ふべしと書き記してある其端に母よりとおりソコデ其小兒の神と思ひしはこれ全く現實の其母なることが分りましたされど如何にして蟇となり玉ひしやら解りませぬものから或は眞實に小兒の神樣の下り給ひしかとも思ひ愈順正しく致しますと母は度々褒美を與へますものから遂に小兒の神は母親であるとのみ思ひますに至りました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

廣告

宮内省御藏板

婦女鑑

全六冊

此書ハ宮内省ノ御藏板ニシテ婦人ノ亀鑑トナルベキ和漢洋ノ孝女烈婦貞女賢母等ノ言行事蹟ヲ蒐輯シ且ツ圖画ヲ挿入セラレシモノニテ既ニ本年一月
皇后宮ヨリ華族女學校ノ生徒ヘ御下賜相成リ實ニ婦人ノ課讀又ハ修身口授用書トシテ其徳性ヲ涵養スルニ於テ最モ有益ノ書ナリ今般弊舖ニ於テ發賣ノ御許可ヲ蒙リ候ニ付婦人ハ勿論苟モ婦女教育ニ志アル諸彦ハ必讀アランコトヲ切望スル所ナリ

但シ右書ハ各賣捌ヘ差出シ有之候間何卒御手寄之書林ニテ御講求被下度候

東京書林
吉川半七恭白

定價金壹圓　郵送料金四拾錢

第九十七號に批評あり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

遞信省認可

●心の寫眞

一各嗜好及性質之記錄（全一册價金廿錢 郵稅金八錢）

令孃愛姊諸君よ諸君が其朋友の寫眞を收めをき賜ふ事誠によしされ共こは唯其外貌を見るのみにして嗜好及性質等は之を知る事を得ず然るに此書は嗜好及性質に關係ある事柄の問題卅一個を撰み各朋友に其答案の記入を請ふものなり故に朋友の心中より出る反射は則ち寫眞となりて見る事を得べし又其側には通常形躰の寫眞を貼るべき欄をも設けたり
此書は殊に年若きものに向て興味あるものなれば多くの友達を持ち賜ふ貴女諸君は早く一本を購求して朋友諸君の心意形躰兩種の寫眞を收めたまへ

發賣書林　靜岡縣靜岡呉服町三丁目　擁萬堂　三浦定吉
同　東京々橋區日吉町八番地　女學雜誌社

子爵久松定弘先生序
春のや朧先生校閲
石橋忍目居士著

一喜一憂 捨小舟

完一册　正價三十八錢　郵稅十四錢

右小說は道德上金錢の羈絆を寫したるものにして無敎育の女子の結果と中等内外の位置ある男子の汚行とを現はしたるものあり

發賣書林　日本橋通一丁目　大倉孫兵衛
京橋南紺屋町　神戸甲子二郎

○開校幷に生徒募集廣告

來る十六日午前九時入學試業を行ひ翌日より授業す尙ほ欠員あり有志者は至急申込みあれ○敎員は英國女夫三名、日本人五名

明治廿一年四月

麻布永坂町一番地島津邸内
香蘭女學校

發兌

四月。七日　十四日　廿一日　廿八日
五月。五日　十二日　十九日　廿六日
六月。二日　九日　十六日　廿三日　三十日
七月。七日　十四日　廿一日　廿八日

定價

一册。五錢　郵稅。一錢（但府内無郵稅）
十册。四十八錢郵稅。十錢（同前）
半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢
一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢

廣告

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む

一行（廿七字詰）一回　前金拾錢
同　三回以上　一割引
同　六回以上　二割引
十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.

Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町園々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町眞明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○橫濱住吉町角田早貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西内大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年四月十二日印刷
明治二十一年四月十四日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷　東京下谷區仲徒町三丁目七十一番地　森田豐

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY